

平成二十六年夏、安倍晋三内閣による集團的自衛權行使容認の閣議決定に際して、岡崎久彦一詩を草し、王蒼海先生の添削を勞せし上、安倍總理に獻ず。

曠古敗戦久奪志

曠古の敗戦 久しく志を奪ふ

託誰民族安危事

誰にか託せん 民族安危の事

父子三代憂國情

父子三代 憂國の情

遂顯集團自衛義

遂に顯かにす 集團自衛の義

爲内閣總理大臣安倍晋三閣下

内閣總理大臣安倍晋三閣下の爲に、

平成甲午岡崎久彦賦詩而書

平成甲午 岡崎久彦 詩を賦して書す。

註

「曠古」 歴史上初めての、前例のなき。

「志を奪ふ」 孔子 論語子罕 子曰はく、三軍も帥を奪ふは可なり。匹夫も志を奪ふ可からざるなり。

「託す」 諸葛孔明 出師の表 願はくば陛下、臣に託するに、討賊興復（漢室）の效を以てされ賜へ。

「顯義」 正義を明らかにす。

「安危」管見

門人 王蒼海

粵王大人芳詠に安危の二字有り。謹んで按ずるに、この二字、言簡にして意深し。

古くは韓非子に安危篇あり。韓非子肺腑の言、二千數百年の治亂興亡を経て更に人を啓發する所あり。その五蠹篇は白眉と云ふべく、孫吳の戰術論と並びて、東亞に於ける現實主義的なる戰略的方法論の濫觴となす。

五蠹篇に韓非子の憎むは、まづ第一に、無責任なる合従連衡の遊說者なり。連衡して敵對的強國たる秦を宥和して安全を圖らむと廣說する徒は、君主を說得しその領土を強國に割讓し、主權の象徴たる國璽を獻納せしめむとすといへども、韓非子斷じて云ふにかかる從屬的關係は一旦有事には全く働かざる可能性を見過ぐすありと。この理、近代史を繙くに、第二次大戰前の蘇聯周邊國に鑑みるべし。

また、六國合従して強國秦に當たらんと強辯する徒は、小の同盟國防衛に兵力を消耗し、無用の紛争に相互に介入し、大國との決戦に及ぶ前に立ちゆかざるの愚を等閑視しゐると云ふ。この理、第一次大戰前の巴爾幹動亂を理解する一助ならむ。

これいづれも、連衡の周、合従の趙がそれぞれ亡國に至りたる教訓を踏まへての論説なり。韓非子は、古典の現代への機械的當て嵌めを最も輕蔑し、株を守ると嗤ふ所なれども、宥和主義と介入主義は俱に濫りに踐むべからざること萬古不易の道理といふべし。

無責任なる遊説者に君主が迷はされ、亡國に至るの轍を踏ましめざらむ爲に、韓非子は、合従連衡の論は何れも空理無益なりとし、國他國を攻むるの強大に非ざらば「治なるは攻めらるべからず」とて法制と自衛を強化して戰國の世に當るべしと至極現實的の意見なり。

法制強化の爲に、五種類の蠹、屋臺骨を食ふ白蟻の徒として、韓非子は第一に孔子の門人を自稱する儒と呼ぶる者を政事より遠ざくるを君主の策とせよと云ふ。韓非子は孔子を天下の聖人として敬意を表しつつも、「海内に仁を説く」模倣論者の現實遊離は言下に之を否定す。仁義は尊きものなれども、孔門の弟子は七十人に過ぎず、仁義をよく理解する者既にこの數を出でず、その上に仁義を天下に躬行し得る者、孔子以外に一體何人あるやと韓非子は問ひかくるなり。

其の實、孔子の高弟とて、外交場裡にて只管仁のみを説くにはあらざりき。衛吳會盟を議するも、居然として成らずとて、吳軍衛公の座所を包圍したる時、衛の外交官たりし子貢が吳の外交官の脅迫を言葉巧みに躲はしたること、「長木の喩へ」の段のごとし。左傳哀公に曰く、「長木の斃れんとするや、標たざるなし、況んや大國に於いてをや」と云ふは、無道なる霸者吳王夫差は命運長からずと雖も、なほ十分衛の患ひとなるに足るの喩へなり。左傳を讀むに、理に鑑みて無道の長からざるを知り、悠揚と説きて事に當るが眞の儒者の外交術と知るべきなり。

韓非子安危篇に曰く、「安危は是非に在り、強弱に在らず」と。まことに國家の興廢はひとへに理非曲直の分明に懸かれば、自ら義を顯らかにせずんば非ず。大人の芳詠を謹解して感嘆已まず。天は自ら助くる者を助くと。